

なぜ、バンテアイ・クディ遺跡を調査・研究するか

石澤良昭

調査団は 1989 年からアンコール・トム主城東側に位置するバンテアイ・クディ遺跡を選び、そこにおいて調査・研究を実施している。ここを選んだ主な理由は次の通りである。

(1) アンコール遺跡の保存修復をどのように進めるかの方法論を確立し、保存修復に関する技術開発を発展させるため科学的データを収集し、総合的学際的調査研究が可能な遺跡である。

(2) バンテアイ・クディは中規模遺構で 12 世期末か 13 世紀の最盛期に建立された。この地域は歴史的に前身遺構がとりぎたされるほど、プレ・ループ遺跡 (961 年) も近くにあり、10 世紀ごろからのアンコール王朝の中心地であった。約 400 年にわたる歴史展開が蓄積されており、そのため、調査研究成果が期待される。

(3) この遺跡には近接してタ・プローム遺跡 (寺院の原初形態と変遷の調査および植物繁茂調査最適地) およびスラ・スラン貯水池 (水利網調査に重要) があり、広分野の学際的調査研究を行う上で最も重要な場所に位置している。

(4) クディ遺跡は塔門・中央高塔・回廊・テラス・環濠・小池などが建築構造・配置構成されている典型的なアンコール遺跡であり、調査研究事項が豊富である。

(5) 建築用材として砂岩・紅土を中心に構築されており、不同沈下箇所や崩壊部分が残存し、他の遺跡との比較調査・研究が可能であり、適度に構造的破壊・損傷が実証できる。

(6) 遺跡へアプローチする場合、広い平地があり、機器の搬出入および小型自動車を使用する際の足場がよい。交通の便 (宿泊所から) もよく、近くに作業員を確保する村落があり、長期間の調査・研究、そしてカンボジアの専門家や学生の研修の場として地の利を得ている。

(7) フランス極東学院が1954年で保存修復活動を中止しており(約40年前)、その後の経過調査の必要性がある。これは遺跡の保存修復を遂行していく上で重要なデータを収集できるし、そのハードな方法論の確立に向けての道を拓くものである。また、典型的な遺構と密林と村落が近接して存続しており、これまでフランス極東学院時代に調査研究が十分でなかった地質学・植物学・生態学・水文学・文化環境調査などが可能である。(石澤良昭)

バンテアイ・クデイ (BANTEAY KDEI)

「僧房の砦」を意味するバンテアイ・クデイはジャヤヴァルマン7世が建立した平面展開の祖寺型の仏教寺院で、スラ・スラン浴地に隣接する。東西700メートル、南北500メートル。塔門の観世音菩薩の四面仏は穏やかな顔で四方を見渡している。中央部は田の字型に回廊がめぐり、複雑な平面展開をなしている。回廊や内庭の祠堂の屋根はほとんど崩れ落ちているが、これらの壁面と格子窓の間には浮き彫りの女神像がひっそりとたたずみ、また入口壁龕に立つ門衛ドゥヴァラパーラ像が、往時の繁栄をしのばせる。祠堂の中には仏像が安置されているが、これは後世に持ち込まれたもの。建材の砂岩の質が良くないために倒壊を早めている。寺院建立以前には、小寺院もしくは「クティ」という名の村落があったともいわれる。

スラ・スラン (SRAH SRANG)

スラ・スランは古クメール語で「水浴の池」の意味であり、王が沐浴した東西700メートルの聖地である。アンコール・ワットの北東約3キロの位置にあるb取水、水路の調査によれば、ジャヤヴァルマン7世の治世以前に、すでに掘削されていたという。12世紀末、同王の時代に砂岩で縁取りされ、西側に2頭のライオン、7つの頭のナーガの欄干と階段がついたテラスが設けられた。池底に、ラテライト(紅土)の敷石があり、王、もしくは高僧がそこまで下りて沐浴し

たといわれている。池の中心の人造小島にはメポン小祠が建てられていた。現在は治水の一部が干上がっている。これはポルポト・時代に食糧増産のために池の水を抜き、稲田に替えたからである。